工業開発と地域の変貌

——鹿児島県志布志町を例として——

高　木　知　子

志布志湾開発については，開発が自然保護かという活発な議論が繰り広げられてきたが，地域産業との関係に焦点をあわせた調査は少ない．そこで本研究は，工業開発と地域産業との関係に注目して進めていった．

志布志町は鹿児島県の最東部で，宮崎県南部と大隅地域の陸上交通の中心的な位置を占めている．人口は20,400人（昭和55年）で，ようやく急激な人口減少に歯止めがかかった時期である．昭和30・40年代の人口減少の勢いはすさまじく，深刻な過疎問題をひきおこした．また目立った産業もみられず，1人当りの所得水準も全国平均と比較して非常に低い．志布志町を含む大隅地域全体がこのような状態にあり，こうした背景から〝工業開発〟というものが浮かびあがってきたのである．

〝工業開発〟という構想が最初に打ち出されたのは，「20年後のかごしま」にである．これは昭和43年に発表されたものだが，その後紆余曲折を経て，55年に「新大隅開発計画」が決定された．この工業開発というのは，具体的には，志布志湾を埋立てて，食品コンビナート，重化学工業，石油備蓄基地を立地させようという華々しいものである．

ところが，当初の計画で埋立用地の1部であったところが最終計画では除外されており，「志布志港港湾拡張計画」という別の名目の下で，昭和54年10月に工事が着工された．港湾拡張工事は以前から行われていたが，それに加えて工場用地も造成され，全農・昭和産業が進出してくることが決定した．

この工事着工は大きな波紋を投じ，他産業に少なからぬ影響を与えた．明白な動きがみられたのは漁業である．まず埋立てにより消滅する漁業権の漁業補償が行われた．その後埋立てによる操業区域の縮少と工事による海洋汚染のためか，昭和55年8月頃から特産物であるちりめんの漁獲量が異常に少なくなった．原因は平年と比較して水温が低かったこともあり，工事の影響と断定するのは早計とも思えるが，資源保護のため沿岸4kmまでしか操業できないちりめん漁にとっては無視できない問題である．農業において最大の影響を受けるのは畜産であろう．大隅地域は畜産が盛んであるが，配合飼料工場の進出が決まっており，より新鮮な飼料が安価に入手できるようになる．また農産物輸送基地も建設され，搬出入に非常な便宜がはかられる．しかし，漁業・農業どちらも労働者の老齢化及び後継者難等、基本的な課題が残されており，その解釈を棚上げにして漁・農業を発展させることは不可能である．その他飲食店の増加・高層ビル・ビジネスホテル建設など商業面の活況をも促進している．

開発の前兆ともいうべきこれら港湾拡張工事の影響を踏まえて，新大隅開発計画が進められた場合を予測すると，更に多方面にわたる影響が考えられる．人口増加・経済的豊かさ，雇用機会増大，町の活況等の効果，あるいは漁業の衰微，種々の公害問題，景観の破壊等の悪影響があげられる．

これらと総合的に判断して，この開発は本当に必要なのか，大隅地域には何らかの開発が必要であるが，この方法が適切かという問題になると疑問に感じている人が多い．工業開発により経済的豊かさを求める時代から価値観も変化しつつある．真にこの地域に適している開発とはどういうものか，今こそ住民と一体となって再考すべきではないだろうか．